

□海外文献紹介□

大腸癌のレーザーによる切除  
および姑息治療

Laser ablation and palliation in colorectal malignancy: *Mathus-Vliegen, EMH, Tytgut GNJ* (Gastrointest Endosc 32: 393-396, 1986)

レーザー治療を行っている西欧の7か所の施設にアンケート調査を行い、大腸癌による閉塞や出血に対するレーザー光凝固による姑息的治療の意義について研究した。レーザー治療の適応により大腸癌181例を閉塞群、出血群、閉塞+出血群の3群に分け検討した。3群間に症例の偏りはない。レーザー治療は手術不能例に限り、閉塞の解除および止血を

治療の目標とした。大部分が外来患者である。

閉塞群60例は平均77歳で、44例が完全閉塞または高度の狭窄であった。通常4回程度の治療で症状の改善を得たが、8例は不成功で、4例に穿孔、出血などの合併症を認めた。平均生存期間は10週であった。

出血群81例は平均73歳で、治療は3回程度が多いが、当初の止血は2回程度で達成された。治療不成功は8例で、輸血や手術を行った。合併症もやはり出血であった。平均生存期間は24週であった。

出血+閉塞群40例は平均70歳で、狭窄の程度は高度なものが28例認められた。止血はほぼ2回の治

療で達成したが、狭窄の解除には3.5回程度の治療を必要とした。治療不成功の4例はすべて狭窄の高度なものであった。生存期間は平均17週であった。

181例のうち161例(89%)に良好な成績を得たが、17例(9.4%)に合併症があり、この治療による死亡は2例(1.1%)であった。また、狭窄の高度の例は予後不良であった。これらの治療成績は手術成績に比較しても遜色なく、レーザー治療は特に大腸癌の出血や出血を伴う閉塞に対し、優れた方法と言える。今後合併症を減らし、治療成績を向上させるため更に検討が必要であろう。

(関東通信病院消化器内科

伊藤慎芳 抄)